



立志社跡の碑（高知市中央公園）

ワン・パーパス 「同じ志」で結ばれた兄弟社 同志社と立志社

文と写真 本井 康博（大学神学部教授）

土佐教会

同志社と土佐の関係を象徴するスポットが、ある。高知市与力町——土佐教会ならびに、併置する聖泉幼稚園の入り口である。「後藤象二郎先生誕生之地」碑が立つ。

この教会は、現在は日本キリスト教団に所属する。戦前までは「日本組合教会」という同志社系の教団に加入していた。創立は、1887年。組合教会系としては、四国では今治や松山などに次いで古い。

教会（ならびに聖泉幼稚園）から150メートルほど離れた所には、板垣退助の誕生地もあり、そこにも記念碑が立つ。後藤は一歳違いの板垣とは幼友たちで、いずれも腕白児であった。土佐教会と附属幼稚園が、板垣の誕生地にも近い後藤の誕生地跡に立っているのは、なんとも奇しきことである。土佐伝道

高知伝道と板垣退助

仕掛け人は、岡山県庁の高宮、中川横

がそもそも、この板垣の提唱で開始されたことを思うと、一層、その感を強くする。高知城追手門内にそびえる板垣退助の巨大な像からは、キリスト教開拓者のイメージなど、まるで察知できない。一体、何があったのか。



後藤象二郎誕生地の碑（土佐教会前）

太郎である。自由民権運動にも肩入れしていたので、板垣とも交流があった。中川は、早くから神戸でアメリカン・ボードの宣教師と接触し、J・C・ペリーやW・テイラーといった医療宣教師を岡山に招聘していた。

板垣は、この中川から宣教師を紹介された。神戸にいたJ・L・アッキンソンである。板垣は彼を高知に招いた。1878年5月にアッキンソンは、村上俊吉（兵庫教会牧師）を伴って、土佐入りした。板垣は、彼らを「立志社」に滞在させて、伝道を支援した。アッキンソンは、立志社を根城に、一カ月ほど滞在して、説教やキリスト教書籍、聖書の販売、配付に努めた。時には、植木枝盛や栗原亮一といった民権家と並んで、演壇に立った。政談と説教が同居する不可思議な演説会であった（拙著『新島襄の交遊』222頁、思文閣出版、2005年）。9月には、逆に植木が同志社に立ち寄った。愛国社再興大会（大阪）に参加した際に、京都に足を延ばしたもので、9月25日は山本覚馬、ついで翌日は同志社を訪ね、新島襄と面談した（『植木枝盛日記』106頁）。

その後、しばらくはキリスト教の空白期が続いた。1883年におよんで、新島襄が動いた。板垣に宛てて手紙を寄せ、大阪教会で牧師を務める同志社の卒業生（熊本バンド）のひとり、宮川経輝を高知に派遣するので、協力してほしい、と訴えた。「来春、20日間ほど御宅に泊めていただき、伝道させてもらえないか」というのである（『新島襄全集』三、254〜255頁）。この要請は、実は追伸である。



板垣退助誕生地の碑（高知市）

本文とは言えば、さながら板垣に対する伝道文書めく。キリスト教入信を篤く勧めている。「閣下^のの御心を新二すること、急務中の急務」と説く。「閣下ニして、新心を得、新民となるるならば、実ニ閣下之大幸、邦家之福祉と存候」(「同前」)。返書の存在は、不明である。板垣がその後、入信(受洗)した事実はない。宮川が、土佐伝道に向いた形跡もない。組合教会が土佐伝道を再開するのは、なおしばらく時間を要する。土佐教会の設立も、そうである。

立志社

板垣退助が土佐に民権結社、「立志社」を立ち上げたのは、1874年4月10日であった。10年で消滅し、現在、中央公園に記念碑が立つ。発足の際に協力したのは、片岡健吉、植木枝盛、林有造といった自由民権家である。初代社長は片岡で、かつての戊辰戦争では、板垣の指揮下で従軍した。板垣は、土佐藩軍指令、東山道先鋒總督府参謀として、会津攻撃^{とうざんげき}の指揮をとり、会津鶴ヶ城を攻めた。籠

城した会津藩士に混じって、西軍と銃撃戦を繰り広げた女性が、山本八重(後の新島八重)である。

立志社が出来た翌年(1875年)1月、新島襄はアメリカン・ボードの宣教師として、大阪に赴任してきた。おりしも2月には、「大阪会議」が開かれ、アメリカで旧知となった木戸孝允や伊藤博文とも再会できた。3月、会議の決議に従い、下野していた木戸孝允と板垣退助は、ともに参議に復帰した。新島はこの時、木戸から、板垣のことを聞く機会があったもの、と思われる。

11月にいたって、京都にキリスト教学校が日の目を見た。同志社英学校である。時には、学生が立志社のメンバーと混同され、当局から危険分子と見なされることもあった。

同志社と立志社

同志社と立志社——両社は、持ちつ持たれつの関係を保った。記録で見る限り、新島が立志社に初めて言及するのは、1880年春の説教中である(『新島襄全

集」二、5頁)。

翌年の1881年7月、新島は有馬(二階坊)で立志社の古沢滋、竹内綱(吉田茂の父)のふたりと面談した。その際、高知に学校を設立することを依頼された。学校設立のその後の経緯は不明であるが、キリスト教系の立志社英学校、あるいは同志社土佐分校が四国に出来る可能性が、少なくとも現実にあったことになる。

逆に、この時の面談で、新島は卒業生の吉田作弥(「熊本バンド」のひとり)を土佐伝道に派遣することを古沢たちに約束した(『新島襄全集』八、223~224頁)。どうやら、立志社の方から伝道師派遣の要請があった模様である。

そこで、神戸英和女学校(現神戸女学院 教員であった吉田は、夏休みを利用して、高知県人の徳弘善明と高知で夏期伝道を行なった。立志社からは、種々の便宜を図ってもらえた。立志社の名前入りの提灯^{ちようとう}を借りて、伝道ができたという。立志社は、板垣の姿勢からも分かるように、キリスト教にシンパシーを覚えている(『新島襄の交遊』222頁)。

当時、「熊本バンド」の小崎弘道牧師

が編集、出版する『六合雑誌』も、「聞く所に依れば、板垣君ハ耶蘇教を深く信仰し」とさえ報じる（『新島襄の交遊』222頁）。創業者同士の繋がりが、兄弟社としての緊密性が、窺える。

新島襄と板垣退助

したがって、板垣が1882年4月に岐阜で刺客に襲われた際、新島が予定を変更して、「大坂ニ寄ラス、直ニ」帰宅し翌日、大津に駆けつけたのも、自然である。ついで大阪にもわざわざ出向き、「板垣ノ眼前ニ於テ」ミルク・セーキを作り、飲ませている（『新島襄全集』五、128、129頁）。あるいは、両者があい見えるのは、この事件直後が初めてか。

「以前からのお知り合いですか」と学生に聞かれた新島は、「いや、わが国のために尽くす、という同じ志を持った人だから、見舞った」と答えた（『新島襄の交遊』212頁。傍点は本井）。新島してみれば、それ以前から「同じ志」（ワン・パース）を持つ「意中の人」であつたからこそ、見舞いに急ぎよ、駆けつけた

のであろう。

さらに新島は、同年9月にも、東京（芝高輪）の後藤象二郎宅に赴き、板垣と面談している（『新島襄全集』五、184頁）。反対に、翌年2月になると、立志社から3人（島本楠弥太ら）が、新島宅を訪ねている（同前五、195頁）。要件は不明で

あるが、新島・板垣を軸にした相互の交流の深さが、窺える。後藤とは、1888年にも陸奥宗光の邸で面談している。年末には大学設立のために1000円の寄附が、後藤から同志社に振り込まれた（同前五、300頁、423頁）。



板垣退助像（高知城）

土佐伝道をめぐる抗争

板垣に戻ると、1884年に至るや、植木枝盛や片岡健吉らと共に、それまでのスタンスを変える。組合教会だけでなく、京浜に拠点を置く長老派教会にも、高知伝道の機会を新たに与え始めたのである。同派からはさつそく、11月にG・H・F・フルベッキらが、そして翌年1月には植村正久といった有力者が現地入りをして、伝道の足固めを行なった。

植村は信徒宅で伝道集会を開く一方で、後楽館（旧立志社）で週2回、旧自由党員たちに聖書を講義した（『福音新報』1885年2月4日）。この成果が、今の高知教会（日本キリスト教団）の設立（1885年）につながる。最初の受洗者の中には、片岡健吉や坂本直寛なおひろといった、かつての有力な立志社社員が含まれる。坂本は、坂本龍馬の甥である。坂本家は、沢辺琢磨（後述）と並んで、二人の宗教者を早くに生み出したことになる。土佐は、戊辰戦争の「勝ち組」だけに、キリスト教世界に向かう潮流は、「負け組」に比べて比較的細い。その中では、

高知教会の動きは、特異である。

長老派による土佐伝道の開始は、土佐伝道で先手をとった組合教会（新島襄）にとつては、ヤキモキさせられる動きであった。教派間の先陣争いというトラブルが、発生しかねなかった。その結果、土佐伝道はいつそ（後発の）長老派教会に委ねて、同志社は手を引いたらどうか、という声まで上がった。歴史的な経緯を重く見る新島からすれば、撤退する理由はどこにもなかった。新島はあくまでも強気であった。伝道は継続された。同志社系の土佐教会は、高知教会に遅れること2年にして、ようやく組織された。

立志社から総長がふたり

新島は、土佐に足を運ぶ機会が得られないまま、1890年1月に大磯で死去した。後継者人事は、難航した。結局、



西原清東肖像画（秋田直躬画、同志社チャペル）

同志社社長（今の総長）を継いだのは、「熊本バンド」の小崎弘道である。彼以降も、そうである。第八代までの7人の社長に限れば、実に5人を数える。残る二人が土佐人である。しかも、いずれも信徒ではあったが、同志社の卒業生ではない。これは、きわめて異色である。

その二人とは、第四代さいじばらきよきの西原清東と第五代の片岡健吉で、板垣退助のかつての同志である。彼らは立志社の活動家として、自由民権運動に従事し、自由の確立のために戦った闘士であつた。西原は、

立志社が発足した3年後に、同社に入社した。後に弁護士を経て、衆議院議員となる。その間、天満教会（同志社系）で洗礼を受け、信徒となる。

こうした異色人事の決め手は、何か。多分に政治的な配慮があった。大隈重信や伊藤博文ら政界の要人が、人事に絡んだ（拙著『アメリカン・ボード200年』175頁）。西原が同志社社長の時、板垣は同志社を訪ね、チャペルで講演をしている（『新島襄の交遊』225頁）。新島のこと

が、脳裏をかすめたであろう。西原は社長を片岡に託し、2年半で辞職し、渡米した。神学校に入学したのである。同志社社長から神学生への鮮やかな転身である。後半生は、テキサスで農場を開き、米の栽培に取り組んだ。

片岡健吉

一方、衆議院議長のまま同志社社長を兼務した片岡は、衆目の期待を集めての就任であつた。けれども、病気がちのために、これという成果を生む間もなく、就任1年半後に、現職のまま高知で死去

した。

同志社からは、8人が葬儀に赴いた。

J・D・デイヴィスも、そのひとりであつた。直接に弔意を表したばかりか、式後、小冊子ながら、英文で片岡の略歴、

Kenkichi Katooka (1903) を出版した。「衆議院議長と教会長老のどちらかを選ばなければならぬなら、長老を取る」といった発言の紹介をはじめ（59）、クリスチャン政治家、片岡の面目が躍如とする内容である。片岡とデイヴィスが、公私にわたつてかなり

親密な交際を続けていたことも、判明する。

デイヴィスが執筆した伝記は、ほかに新島伝があるだけである。デイヴィスの傾倒振りが、窺える。

県議会の初代議長でもあつた片岡は、銅像となつて、県議会の玄関前に

立つ。今に至る歴代の同志社社長・総長の中で、等身大の像は、新島七五三太像（函館）を除けば片岡だけである。生誕地（市内本町二丁目）には、「片岡健吉先生誕生の地」碑が立つ。説明文は、「また、基督教徒であり、同志社社長をつとめた」で結ばれている。晩年の片岡は、遠からず政界の仕事すべて清算し、全身を同志社に捧げるつもりであつた、とデイヴィスは伝える（58）。

片岡を社長に迎えた時、新島八重はま



片岡健吉像（高知県庁前）

だ健在であった。かつて会津戦争で応戦した敵手が、いまや亡き連れ合いの後釜に据えられたことをなんとなく思ったことだろう。

自由が切り結ぶ兄弟社

新島が人生で最初に出会った土佐人は、ジョン万次郎である。江戸で英語を修行中、新島は万次郎の指導を受けた。ついで、坂本龍馬の甥、沢辺琢磨である。「時計取得事件」で江戸から追放され、函館

で神官となっていた時、新島と出会い、新島の密出国を手引きした。

アメリカから帰国後の新島は、土佐の自由民権家たちと好んで交流するようになった。政治と宗教の違いこそあれ、自由への共鳴からであろう。板垣と並んで、植木枝盛との交際も、深かった（高久嶺之介「新島襄と自由民権家の群像」280頁、同志社編『新島襄——近代日本の先覚者』晃洋書房、1993年）。

新島旧蔵の「尋知姓名簿」（住所録）

には、板垣退助を始め、古沢滋、片岡健

ては不明」とある。が、来るべくして来た文庫ではなからうか。

高知市の自由民権資料館（鷹匠町二丁目）の入り口脇、さらには立志社跡碑に寄りそうように、「自由は土佐の山間より（出づ）」と掘られた石碑が目につく。

ボストンで「自由人」となって帰国した新島にしてみれば、板垣や植木を始めとする民権家とは、双互の土俵や土壌は違うものの、スクラムが組める相手であった。

新島が目指した同志社は、自由教育（リベラル・アーツ教育）を軸にした自由人養成学校だった。「神なき民権」には批判的ではあったが、その点、立志社は多少ともキリスト教に理解を示す政治結社と思われた。

新島は彼らを真の「同志」（ワン・パーパス）とするべく、立志社との関係を重く見たのでは、なからうか。

京都と土佐の兄弟社は、つかの間の蜜月を楽しんだかのようである。



片岡健吉誕生地（高知市）

吉、植木枝盛など周知の名前が出る。植木の死後、同志社大学図書館へ彼の旧蔵書、「植木文庫」が寄贈された。同志社大学図書館報、『びぶりおてか』（二、1978年2月）には、「この文庫が、なぜ、同志社に寄贈されたかについ